者群、要するに悪の破廉恥漢のだらしない支配の権利に対する戦闘の開始を、感じとったからである。

人民委員が欲したところをいくら叫んでもかれらの仲間からはだれもこなかった。ただ「裏切者」という反対の叫び声が、かれらにかれらの人気の担い手たちの考えを知らせただけであった。

義勇軍の成立　当時はじめて、多数の若いドイツ人が「安寧秩序」のために――かれらはそう考えたのだが――もう一度軍服をつけ騎兵銃や小銃を肩にかついで、鉄カブトをかぶって敵国の破壊者に対抗する覚悟をしたのだった。志願兵としてかれらは、義勇軍に結合し、かれらは革命をおそろしく憎んでいたのに、この革命をかばい、かくして実際に革命を強固にしはじめたのだった。かれらはそれが最もよいと信じてそう行動したのだ。

革命のほんとうの組織者であり、革命の事実上の張本人である国際主義のユダヤ人は、当時この状態を正しく判断していた。ドイツ民衆は、ロシアにおいて成功したようには、ボルシェヴィキの血の沼に引きこまれるほどには、まだ熟していなかった。これは大部分、ドイツ・インテリゲンツィアとドイツ手工労働者の間に人種的にいぜんとして大きな統一があったからである。さらに教養のある分子が民衆階層の中に、このうえもなく広くよく浸透していたためである。これは他の西欧諸国においてもよく似た場合があるが、ロシアでは、完全にこれが欠けていたのだ。ロシアでは、すでにインテリゲンツィア自身が大部分非ロシア的国民性をもち、あるいは少なくとも非スラブ人種的性格をもっていた。当時のロシアのまばらなインテリ上層は、当時民族の大

部分をしめる大衆に結合する中間成分を完全に欠いていたために、いつでも排除することができたのだった。そして大衆の精神的、道徳的水準は、ロシアでは驚くべく低かったのだ。

ロシアでは、無学な、読み書きのできない大衆の群をかれらと何の関係も連絡もないまばらなインテリ上層に対して扇動することに成功するやいなや、この国の運命が決定した。すなわち革命が成功したのだ。それと同時にロシアの文盲者たちは、ユダヤの独裁者の抵抗力のない奴れいにされてしまった。もちろんユダヤ人の側では、この独裁を「人民の独裁」という文句で表現せしめるほどにじゅうぶんにこうかつだった。

逃亡兵に対する不適当な寛大さ　ドイツではさらに次のようなことが加わった。すなわち、革命は、軍が漸次崩壊してきただけで成功することは確かであったが、革命の真の担い手や軍隊の解体者が前線の兵士でなく、故国の駐屯地でぶらぶらしていたり、あるいは「欠くことのできないもの」として、どこかで経済にたずさわっていた多少とも光を恐れる破廉恥なやつどもだったことも、たしかだった。この軍勢は、特別の危険もなく前線に背を向けることができた何万という逃亡兵によって、なお強化された。ほんとうのひきょう者は、いつの時代でももちろん死より恐ろしいものはないのだ。だがかれは前線で毎日、千度も死を目撃してきたのだ。もし人々が弱い優柔不断な、あるいはまったくひきょうなヤツらに、それにもかかわらずその義務をはたさせたいならば、それには昔からただ一つだけ可能性がある。すなわち、それは逃亡兵に、逃亡というものがまさしく自分が逃れようとしているものを、自分といっしょに運んでいるものだとい

角川文庫
—3144—

完訳

わが闘争

（下）

アドルフ・ヒトラー
平野一郎
将積茂 訳

角川書店